

2020年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者(団体)、あるいは活動・研究を計画している者(団体)を幅広く対象とし、2000年度から募集を始めた奨学金です。

(A) ジェンダーフォーラム論文賞

対 象: 学部学生・大学院生(個人・団体)	提出書類: ①ジェンダーフォーラム論文賞申込書*
支 給 額: 優秀:10万円、佳作:5万円	②論文(日本語2万字以内の未発表論文)
採用件数: 1~4件	備 考: 執筆にあたってはジェンダーフォーラム『年報』投稿規定に従うこと。
選考方法: 論文審査	

書類提出期間: 2020年 10月 1日(木) ~ 2020年 10月 31日(土) まで

書 類 提 出 先: ジェンダーフォーラム (gender@rikkyo.ac.jp) に電子メールの添付ファイルで提出

採 用 発 表: 11月 23日(月) 学生課奨学金掲示板(池袋/新座)、ジェンダーフォーラム掲示板(10号館連絡通路)に掲示予定

授 与 式: 11月末~ 12月上旬(予定)

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(A)・(B)の申込書(願書)の利用目的】

標記の申込書(願書)で取得した個人情報は、奨学金採用者(団体)の選考および発表のために利用する。採用者(団体)の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。

以上に同意した上で、申込書(願書)を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「プライバシーポリシー:立教大学における個人情報の取扱いについて」(<https://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/>)に準じる。

※(B)活動・研究助成金の募集は終了しました。

詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。

ジェンダーフォーラム事務局(池袋キャンパス 6号館 1階) Tel:03-3985-2307 E-mail:gender@rikkyo.ac.jp

*申込書、願書はホームページ上からダウンロードできます。(<http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>)

2020年度ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金 B 奨学生決定!

2020年度前期に募集いたしました(B)活動・研究助成金には2件の応募があり、2020年5月11日に開催された選考委員会において、2件に助成金を授与することを決定いたしました。選考結果は下記のとおりです。

ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(B)活動・研究助成金選考結果

奨学生氏名(所属)	研究課題	支給額
渡部 美優貴(文学研究科英米文学専攻博士前期課程2年)	「パフォームされる女性性——女性描写から見るEdger Allan Poe作品におけるフェミニズム」	10万円
及川 英(文学研究科英米文学専攻博士後期課程1年)	「Edith Whartonの <i>Summer</i> における家族表象の特異性——養子縁組・結婚を中心に」	5万円

立教大学ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」にとらわれず、性差やセクシュアリティ(性自認・性的指向など)についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー(gender)とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女/男らしさ」「女/男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念・制度・規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館(1998年閉館)の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒアワーなどを開催しています。

開 室 日: 毎週月曜日~金曜日

開 室 時 間: 10:00~16:00

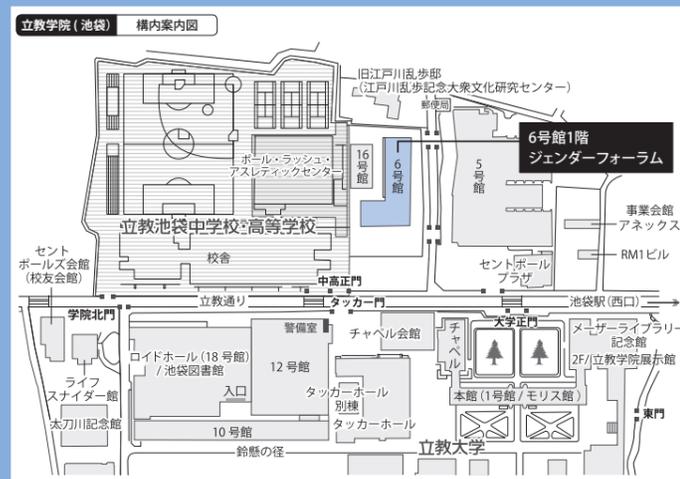
※新型コロナウイルス対策のため、一時的に開室日時を変更する可能性があります。詳しくはホームページをご確認ください。

場 所: 立教大学池袋キャンパス 6号館 1階

TEL&FAX: 03-3985-2307

E-mail: gender@rikkyo.ac.jp

URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>

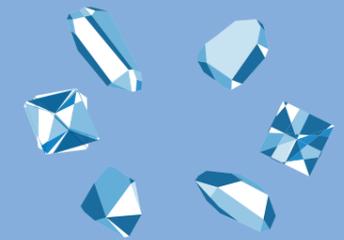


詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPをご覧ください。

GEM

Vol.43 2020.10.01

Rikkyo Gender Forum News Letter



Gender Forum
Rikkyo University



Gemとは…命名時には本フォーラムがその精神を受け継いでいる立教大学女子寮ミッチェル館(1998年閉館)の“M”にちなんだものでした(Gender Encountering in Mitchell)。現在はさらなる発展を企図して、ジェンダー平等の実現を目指すことを意味するGender Equality in the Makingとし、ニュースレター、メーリングリストの名前として使用しています。

ロザリー・レナード・ミッチェル記念 奨学金(B)活動・研究助成金

所長所感——授賞式にかえて



5月11日に2020年度ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(B)の選考会が行われ、文学研究科英米文学専攻博士前期課程2年の渡部美優貴さんの「パフォームされる女性性——女性描写から見るEdger Allan Poe作品におけるフェミニズム」、文学研究科英米文学専攻博士後期課程1年及川英さんの「Edith Whartonの*Summer*における家族表象の特異性——養子縁組・結婚を中心に」の二つの研究が採択されました。例年、授賞式が行われているのですが、本年は新型感染症拡大を考慮して式を中止するという判断をせざるを得ず、代わりにこのGemの紙面を通じて、お祝いの言葉をお伝えいたします。おめでとうございます。

お二方の研究成果は今年度の『ジェンダーフォーラム年報』に掲載されることになっておりますので、是非みなさま、お読みください。わたしも次の号でお二方がどのようなかたちで成果を仕上げてくるのか、いまから楽しみにしております。

この通称ミッチェル奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者(団体)、あるいは活動・研究を計画している者(団体)を幅広く対象とした奨学金です。春学期には活動・研究についての助成を目的とした(B)、秋学期には未発表の投稿論文を対象とする論文賞である(A)という年2回の募集を行っています。

昨年のミッチェル奨学金(B)受賞者についても、その成果の延長で、順調に博士論文の完成に近づいたり、日本学術振興会特別研究員に採用されたりといったうれしい報告を耳にしています。また、残念ながら受賞には至らなかった(A)応募者の方が、審査時のコメントを参考しながら、専門紙の大きな論文賞に応募し奨励賞を獲得したというお話を聞いてもいます。奨学金というものは単に現時点での成果にお金を出すということだけではなく、そこからさらにその後の大きな仕事に結びつく教育的なものであることが重要なはず。ミッチェル奨学金は、本学の女子学生寮の設立時に功績のあったロザリー・レナード・ミッチェル氏の遺志を発展的に継承すべく設立されたものです。この奨学金が“人を育てる”ものとして意味を持ち続けていることに誇りを感じています。

興味がある学生は、是非、応募してみてください。熱意のこもった、新しい研究を楽しみにしています。

片上平二郎(ジェンダーフォーラム所長/社会学部社会学科准教授)

開催日：2020年8月3日(月)

オンラインでのコーヒアワーに参加して

2020年度の春学期は、コロナウイルスの影響により、大学内外を問わず、人々が大きな変化を経験し、また適応していく学期となった。7月末の試験期間が終わったタイミングで、ジェンダーフォーラムでは昨年度ぶりのコーヒアワーが開催された。参加者はZoomを通して、ジェンダーにまつわる話、コロナ禍の大学生活や近況報告などを気軽に話し、耳を傾ける時間を持った。

本来であれば6号館1階にあるジェンダーフォーラムで、お茶やお菓子とともに開かれるコーヒアワーであるが、Zoomでの開催に変わり、職員の司会で進んだ今回においても、10名ほどの参加者が語り合う時の雰囲気には大きな違いはなかったように思う。普段のような直接的な出会いの機会になりにくかった反面、学部やジェンダーを問わず、さらにセカンドステージ大学や、大学外部の方、卒業生の方まで、幅広い属性の人が画面上に集まり、オンラインならではの参加のしやすさが良い方向へ働いた貴重な場となった。

コロナ禍において、各コミュニティでの人間関係の変化、その適応の難しさは立場を超えて参加者みなで共有する部分であり、さらに自身のジェンダー観、セクシュアリティに関わる話

など、相手を選ぶようなトピックでも、ある程度の安全性が担保された環境で語らうことができた。各自が新しく始めた事や関心を断片的に共有することで、新しい出会いにつながる機会にもなったようである。学部生の将来の悩みにたいして、セカンドステージの方が助言をする場面も見受けられ、これは立教大学ならではの光景ではないかと感じられた。

春学期で終わると思っていたオンライン授業であるが、すでに秋学期も継続することが決まっており、コロナの影響はかなり尾を引きそうな予感である。双方向で気軽に対話し、ジェンダーへの関心を共有した人々と新たに出会う機会として、ぜひ秋学期も頻度を増やしてコーヒアワーが開かれることを望みたい。

佐藤乃愛(本学社会学部現代文化学科2年)

2020年度全カリ紹介 「小さなメディアの制作・発表からジェンダーを考える」

ジェンダーフォーラムでは、毎年、全学共通カリキュラムに授業を企画提案してきています。2020年度はライター、翻訳家の野中モモさんに「小さなメディアの制作・発表からジェンダーを考える」と題したゼミナールをお願いいたしました。

野中さんは、執筆、翻訳というお仕事とともに、ミニコミ、同人誌、ZINE、フリーペーパーなどのさまざまな自主制作出版物を紹介する活動を展開していらしゃってもあります。これら個人的な視点に基づいて表現、情報発信を行うメディアは見過ごされがちな存在ではありますが、ジェンダー平等という問題についても、大きな役割を果たしてきました(野中さんが翻訳というかたちでその意味を紹介してくださった本に『ガール・ジン——「フェミニズムする」少女たちの参加型メディア』があります)。授業の中でそのような“小さな”メディアの意義を学ぶとともに、実際に自分の手でジェンダーにまつわる問題意識を反映した小部数の紙媒体を作成することで、学生のみなさんに自分自身の視点から表現することの大切さ、そして面白さを学んでいただければと思います。

野中さんには昨年度も、ジェンダーフォーラムが提供するコラボレーション講義をお願いしていました。映画・出版・美術・音

楽などさまざまな文化活動に携わるゲスト講師と野中さんの対話を聞くことを通じて、学生のみなさんに多様な視点が開かれる刺激的な内容の授業でした。去年度の講義科目はゲストも多彩で多人数の受講生の大規模なものでしたが、本年度はその延長ではありますが、ある程度人数が限定されたゼミという形式で展開していきます。新型コロナウイルスの影響によって残念ながら、オンライン開講というかたちにせざるを得ない状況ではありますが、そんな特殊な条件下でも“新しい”表現方法を模索する活発な授業になると思っています。

野中さんは今年の3月に『野中モモの「ZINE」——小さなわたしのメディアを作る』という書籍を発表しています。ご自身の経験もふまえながら、自分でメディアをつくっていくことのおもしろさを語った本です。残念ながら、今回の授業を受講できない方々もこちらの本を手にとって、小さなメディアが存在する意味について考えてみてはいかがでしょうか。

片上平二郎

(ジェンダーフォーラム所長／社会学部社会学科准教授)

図書館企画展示の紹介

ジェンダーフォーラムでは、大学図書館と人権・ハラスメント対策センターとの共催で図書館での企画展示の準備を進めています(2020年10月下旬開始予定)。この展示では、ジェンダーやセクシュアリティ、ハラスメントに関して、図書館の所蔵書籍を中心に、初学者への入門書やお勧めの一冊を紹介する予定です。大学で学び、働く者として、新型コロナウイルスによる大きな痛手の一つだったのが図書館の閉館でした。その後、現在では予約制での入館が再開され、職員の方々のおかげで郵送貸し出しもできるようになりました。ですが、書架のあいだをゆったりと歩き、気になった本を手にとって未知の本と巡り合う喜びは、残念ながら今はなかなか味わうことが難しい状況です。

本を読み、学ぶことは、単に知識を吸収するだけに留まらず、まだ言葉にできていない自分の中のモヤモヤした感情や体験を、言語化して把握できるようにする行為だと私は常々感じています。その意味で、ジェンダーやセクシュアリティのように日常生活と切っても切り離せないにもかかわらず、うまく言い表すことのできない事態に直面することの多い領域にとって、読書はとても重要な実践ではないでしょうか。近年、ジェンダーやセクシュアリティに関する分野で、読書をテーマにした本が次々と刊行されています。例えば、

原ミナ汰／土肥いつき編著『にじ色の本棚：LGBTブックガイド』(三一書房、2016)や、柳原恵『＜化外＞のフェミニズム：岩手・麗ら舎読書会の＜おなご＞たち』(ドメス出版、2018)、あるいは北村紗衣『シェイクスピア劇を楽しんだ女性たち：近世の観劇と読書』(白水社、2018)などの本は、読書という行為が個人的なものであると同時に、ほかの人たちと共に読み、楽しみ、語り合うことを通じてコミュニティを生み出すものでもあるということ、そしてただ一方的に情報を得るだけでなく、時にあるテキストの既存の解釈をゆさぶり、新たな読みの地平を切り開くスリリングな体験でもあることを気づかせてくれます。

上記の図書館展示では、学生のみなさんがジェンダーなどに関する基礎知識を得て、お互いを尊重し合えるキャンパスライフのための手がかりになるような本を紹介するだけでなく、読むという行為の豊かさを堪能できるような選書ができればと思っています。乞うご期待ください。

片岡佑介(ジェンダーフォーラム教育研究嘱託)